様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｈ０４０７６

研究課題名（和文）「開発と平和のためのスポーツ」におけるアフリカ・女性

研究課題名（英文）Africa and Women in the Area of Sport for Development and Peace (SDP)

研究代表者
岡田　千あき（Okada, Chiaki）

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：４０３３５４０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、開発や平和構築の周縁に置かれている「アフリカ」の「女性」のSDPの事例に着目した。未だ開発課題が山積している3か国(タンザニア、南スーダン、ジンバブエ)で現地調査を行い、①女性スポーツの歴史と現状、②SDP活動の目的と内容、③期待された成果と参加者の変化を検証した。
その結果、参加者が知識や技能を身に付けるといった結果以上に「元気が出る」「意欲がわく」「未来に希望を持つ」などの抽象的な成果が強調された。南スーダンでは“nigas”(厭世観を持つ非行少年)、ジンバブエでは“idle”（ダラダラした)、タンザニアでは“dull”(だるい)などと表現される青少年の現状が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
複数の共著論文を発表し、オンラインで学会発表、講演などを行った。また、最終年度には、ジンバブエ、タンザニア、南スーダンの関係者にフィードバックを行うと同時に、今後の連携についての協議を開始した。本研究が終了した2023年3月現在においても、これらの国々との良好な関係性は継続されており、研究成果の有効な活用方法と新たな研究テーマの設定について意見交換を行っている。特にタンザニアにおいては、本研究の実施がきっかけでJICA専門家が派遣され、ダルエスサラーム大学との連携が始まった。また、ジンバブエにおいてもJICA海外協力隊のYASDへの派遣が決まるなど、一定程度の社会的意義もみられたと考えている。

研究成果の概要（英文）：In this study, we focused on “Sport for Development and Peace: SDP” cases for “women” in “Africa,” who has been placed on the periphery of development and peacebuilding. Field surveys were conducted in three countries (Tanzania, South Sudan, and Zimbabwe), where there are several development and peace related issues, to examine (1) the history and current status of women's sports, (2) the purpose and content of SDP activities in the field, and (3) expected outcomes and changes in participants after the implementation of SDP program.
As a result, outcomes such as “more energetic,” “more motivated,” and “more hopeful for the future” were strongly emphasized compared to the outcomes such as participants acquiring knowledge and skills. The current situation of young people, known as “nigas” (delinquents who are pessimistic about life) in South Sudan, “idols” in Zimbabwe, and “dal” in Tanzania, was revealed.

研究分野：スポーツ社会学、開発学、ジェンダースタディーズ

キーワード：開発と平和のためのスポーツ(SDP)　タンザニア　ジンバブエ　南スーダン　女性　ジェンダー　エンパワメント　スポーツ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、スポーツの実施や観戦を目的とするのではなく、スポーツを手段として社会課題の解決を図る「開発と平和のためのスポーツ(Sport for Development and Peace: SDP)」の概念が、国際開発やスポーツの実務・政策に活かされている。1990 年代半ばから発展した分野であり、日本においても東京五輪招致の際に「スポーツ・フォー・トゥモロー」「スポーツ国際貢献」の実施が約束され、SDGs (Sustainable Development Goals) へのスポーツの寄与も目指された。また、開発、平和分野における女性の役割は、2000 年代に入り重要性を増している。世界の人口の約半分を女性が占めており、「開発の大望は人類の半分が取り残されたままでは実現できない」(アフリカ人間開発報告書 2016)ためである。国連開発計画総裁は、「ジェンダー不平等と女性差別に対処できなければ、SDGs を達成することは不可能である」と明言しており、差別への対処はもちろん、開発と平和の推進にも女性の力が必要とされている。

本研究では、開発や平和構築の周縁に置かれ、これらが最も重要であると考えられる「アフリカ」の「女性」の SDP の事例に着目する。社会的困難を有する中でも行われるスポーツ活動を検証することで、これまであまり注目されてこなかった手段としてのスポーツの価値を再考する。手段としてのスポーツが開発や平和構築に有効であるか、有効であるとしたらどのような条件下において有効か、について、ジェンダーの視点から明らかにすることは、今後の SDP の発展のために不可欠である。

２．研究の目的

開発・平和構築へのスポーツの貢献と、貢献がなされるとしたらその際の条件をアフリカの複数国で行われている SDP 活動の検証から明らかにする。未だ開発課題が山積しているサブ・サハラ・アフリカの 3 か国(タンザニア、南スーダン、ジンバブエ)の「女性のための『開発と平和のためのスポーツ(SDP)』活動」に焦点を当てる。

3 ヶ国で現地調査を行い、①女性スポーツの歴史と現状、②SDP 活動の目的と内容、③期待された成果と参加者の変化を検証する。これらのミクロな調査結果を、④各国の社会経済状況、⑤世界やアフリカのスポーツの趨勢などのマクロな視点で再検証し各国間の比較を行う。比較検討から共通項を見出し、アフリカ女性のスポーツの課題を明らかにすると同時に、開発・平和構築の文脈でスポーツが生み出す成果、さらには、それらの成果を担保する条件の導出を試みることが本研究の目的である。

３．研究の方法

女性のための SDP 活動を行う 3 か国(タンザニア、南スーダン、ジンバブエ)で現地調査を行い、①活動目的と内容、②期待される成果、③実際に参加者に生じた変化を検証した。予備調査として、各国の社会状況(教育、労働、家庭、住居など)、活動の目的と内容(活動の概要、実施に至る経緯、資金調達、公との連携、メディアの活用など)を文献研究と関係者へのメールや Zoom 等を用いた聞き取りから明らかにした。コロナ禍での渡航規制がかかり、本調査の時期が遅れたものの、2022 年度からは、現場での参与観察と、①活動の印象、②活動参加の意義、③具体的な変化(参加後の就学・就業、生活や心理面での変化など)に関する参加者への半構造化インタビューを行った。予定していた補足調査は、研究計画の変更によって十分に行うことができなかったが、本調査の結果を関係者にフィードバックし、結果に関するコメントを聴取した(本来は、結果の分析を合同で行う予定であったが、研究期間の延長に限りがあったことからコメントの聴取にとどまった)。以下は、対象とする 3 か国の背景である。

【タンザニア】

タンザニアでは女性への暴力や若年妊娠が問題となっており、男女格差を表す「ジェンダー不平等指数」は世界 129 位(159 か国中)である。スポーツ省、スポーツ振興センター、国際協力機構は、ジェンダー平等と女性のエンパワメントを目的に全国陸上競技大会 “Ladies First”を開催し、2018 年大会には、24 地域から 100 人以上の女子選手が参加した。大会では、観戦に訪れた近隣の小中学生に性教育教材の朗読や若年妊娠防止のための観劇などの啓発活動も行っており、その成果は令和元年 9 月国連総会での安倍総理の一般討論演説で国際社会に披露された。研究代表者は、第 1 回大会から本イベントの企画に関わり、現地スポーツ省や陸上競技連盟などと信頼関係を築いていた。主な調査対象は、“Ladies First”の参加選手、コーチ、陸連関係者、スポーツ省、国家スポーツ委員会の職員などであった。

【南スーダン】

南スーダンでは、2011 年の独立後も政治権力争いが続き、2019 年現在、全人口の約 3 分 の 1 が国内外避難民となっている。民族・国民間の信頼の欠如が、紛争の拡大、長期化の 主な原因と言われる中、文化・青年・スポーツ省は、「スポーツを通じた平和促進」を目的に「国民結束の日(National Unity Day: NUD)」を 2016 年より開催している。NUD には、南スーダン各地から約 350 名の青年が参加し、1 週間に渡って合宿生活を送る。異なる民 族・地域の出身者が混成する部屋割りをあえて行い、競技の合間に「HIV」「ジェンダー」「平和構築」などに関するワークショップを行うなど、他者への関心や尊厳の意識を高める取り組みがなされている。主な調査対象者は、NUD の参加選手、スポーツ省、スポーツ連盟関係者、マスメディアなどであった。

【ジンバブエ】

ジンバブエ政府は、2005 年に“Murambatsvina” (大掃除) という都市スラムの一掃を行 い、約 70 万人が一夜にして住居や商店など生活の糧を失った。その時期に設立された“Youth Achievement Sports for Development”(YASD)は、スポーツを通じたコミュニティ形成、女性の小規模ビジネス支援、HIV/AIDS・薬物乱用・女児の早婚に関する啓発などを行うローカル NGO である。YASD は、これまで世界 16 か国で開催された国際フットサル大会「ホームレスワールドカップ(Homeless World Cup: HWC)」(2003 年から毎年 500 名のホームレス選手が参加して開催されている)にチームを派遣しており、2018 年の国内選考会にはジンバブエの青年約 600 名が参加した。YASD は、研究開始時に HWC への女子チームの派遣を検討しており、活動の対象の中心に脆弱性の高い女性たちを据えようとしている時期であった。主な調査対象者は、HWC 選考会に参加する女子選手、他の YASD の活動への参加女性、YASD スタッフ、関連団体スタッフ、コーチなどであった。

４．研究成果

本研究では、初年度に 「女性とスポーツ」「開発と女性」「女性・スポーツ・開発」 に関する研究のレビューを行い、と日本における活動に関する検証を行い、その成果を元に 2 年目以降に 3 か国の活動について調査を行う予定であった。各国において、予備調査、本調査、補足調査と 3 回のフィールドワークで、関係者や裨益者への聞き取りを行う予定であったが、コロナ禍の渡航規制を受け、調査の時期や内容の大幅な変更を余儀なくされた(実績報告書等で報告済み)。

研究の初年度には、タンザニアへの渡航予定を変更し、「女性スポーツの歴史と現状」「SDP 活動の目的と内容」に関して、これまでに収集した資料の整理と Zoom 等を用いた予備調査の実施をメインに研究を進めた。オンラインを活用して現地調査の下準備を開始すると同時に、日本国内の「女性とスポーツ」に関して見聞を深める機会を得ることができ、「スポーツと月経」に焦点を当てた研究会に参加することとなった(民族学博物館共同研究『月経をめぐる国際開発の影響の比較研究：ジェンダー及び医療化の視点から』)。「スポーツと月経」は、タンザニアで女子選手を対象に行ったワークショップの中で、「女子アスリートの課題」として頻出したものであり、兼ねてより関心を持っていた。研究代表者は、医療的、保健的バックグラウンドを持たないことから踏み込むことを躊躇していたが、コロナ禍の渡航規制の中で、日本国内において「スポーツと女性」に焦点を当てることができた故と考えている。2020 年度は、フィールドワーク、国際学会への参加ともに叶わなかったが、海外のフィールドとオンラインを用いてやり取りをしたり、国内の研究者、実務者との新たなつながりを作ることによって、国内外の関係する研究者や実務者とのネットワークを構築した。

2 年目も初年度と同様に、渡航計画を変更せざるを得なかった。上半期は、3 ヶ国での現地調査の目途が立たなかったが、「各国の女性スポーツの歴史と現状」「SDP 活動の目的と内容」に関して、オンラインでの資料収集と Zoom を用いた打合せをメインに研究を進めた。下半期に入り、依然として渡航規制がかかっていたため、共同研究者の YASD のスタッフを中心に質問紙調査を実施した。YASD は、コロナ禍の影響で、当初予定していた HWC 関連の活動を一旦休止し、“GOAL”と名づけられた腑弱性の高い女性たちに対する新しい支援プログラムを立ち上げていた。このプログラムは、コロナ禍にみまわれた女性たちにスポーツや運動を通じて「健康」「節約」「エンパワメント」「自尊心」などを学ぶ機会を提供する目的で行われていた。質問紙調査では、“GOAL”の目的、内容、成果、課題などを明らかにすべく、「GOAL コーチ」として任命され、活動を行っていた女性たちを対象とした。質問紙調査により、実際の SDP の現場における生の声や情報を収集することができた。

3 年目に入り、段階を追って渡航規制が解除されたことから、南スーダンでの現地調査を行った。すでに、オンラインの活用や国内での情報収集を行っており、共同研究者との連携もスムーズであったことから、一部計画の変更があったものの本調査に入ることができた。南スーダンでは、2011 年の独立後も断続的に紛争が起こる中、2016 年より「スポーツを通じた平和促進」を目的に「国民結束の日(National Unity Day: NUD)」を開催している。NUD の主催者、関係者へに対して、共同研究者と共にインタビュー調査を行い、平和構築の過程において女性たちに期待される役割と、スポーツが平和構築のためにできる貢献を明らかにした。調査の時期が何度も変更され、また、NUD についても 2021 年度、2022 年度大会は当初計画から形を変えて開催されたものであったが被調査者の NUD への思いが強く、想定以上の調査への協力を得ることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Okada Chiaki、Joseph Lemor William	４．巻 15
２．論文標題 Peacebuilding through Sport: Adopting a Gender Studies Perspective	５．発行年 2024年
３．雑誌名 The International Journal of Sport and Society	６．最初と最後の頁 27～46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18848/2152-7857/CGP/v15i02/27-46	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Chiaki Okada	４．巻 2
２．論文標題 Gender and "Sport for Development and Peace" during the COVID-9 Pandemic: A Qualitative Analysis of Activities in Zimbabwe	５．発行年 2023年
３．雑誌名 スポーツと開発	６．最初と最後の頁 10-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Chiaki Okada	４．巻 9
２．論文標題 Confronting Gender Issues with Sports for Dedvelopment and Peace: The Case of Zimbabwe	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Osaka Human Sciences	６．最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岡田 千あき	４．巻 48
２．論文標題 ジェンダー課題に対峙する「開発と平和のためのスポーツ」：ジンバブエの事例から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大阪大学大学院人間科学研究科紀要	６．最初と最後の頁 89-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/86863	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Chiaki Okada	4．巻 8
2．論文標題 Intersections of Development, Gender, and Sport	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Osaka Human Sciences	6．最初と最後の頁 152-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/86903	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kazuhiko Saito, Yoshihiko Maruta, Tomoya Shiraishi, Chiaki Okada	4．巻 1
2．論文標題 The Current State of Secondary School Physical Education and Related Challenges in the Republic of Uganda	5．発行年 2022年
3．雑誌名 スポーツと開発	6．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡田 千あき	4．巻 31
2．論文標題 「開発と平和のためのスポーツ（Sport for Development and Peace：SDP）」の変遷と課題	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国際開発研究	6．最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32204/jids.31.2_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Chiaki Okada	4．巻 26
2．論文標題 Can Overcoming Issues of Gender be an Olympic Legacy (Commentary): A Need for Comprehensive Change	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Sport in Society	6．最初と最後の頁 147-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/10430437.2021.1961745	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡田千あき	4．巻 47
2．論文標題 開発・ジェンダー・スポーツの節合	5．発行年 2021年
3．雑誌名 大阪大学人間科学研究科紀要	6．最初と最後の頁 23-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/79068	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Chiaki Okada	4．巻 12
2．論文標題 Poverty Reduction through Sports: A Case Study of Five Countries Participating in the Homeless World Cup	5．発行年 2021年
3．雑誌名 The International Journal of Sport and Society	6．最初と最後の頁 91～106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18848/2152-7857/CGP/v12i01/91-106	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　6件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 岡田千あき
2．発表標題 COVID-19流行下における『開発と平和のためのスポーツ』とジェンダー：ジンバブエのGOALプロジェクトの事例から
3．学会等名 日本運動・スポーツ科学学会国際健康・スポーツ分科会第20回記念大会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Chiaki Okada
2．発表標題 Japan’s Contribution to Human Security through Sport in the Global South: Sport as a Tool of Soft Power in Modern International Relations
3．学会等名 The French Institute for International and Strategic Affairs (IRIS)（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 岡田千あき
２．発表標題 スポーツを通じた平和構築と女性のエンパワメント
３．学会等名 いちだい地域共創プロジェクト『開発と平和のためのスポーツ』オンラインセミナー（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Chiaki Okada
２．発表標題 Gender and “Sport for Development and Peace” during the COVID-19 Pandemic: A Qualitative Analysis of Activities in Zimbabwe
３．学会等名 13th International Conference on Sport and Society（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡田千あき
２．発表標題 月経・スポーツ・開発をめぐる四方山話
３．学会等名 民族学博物館『月経をめぐる国際開発の影響の比較研究会』（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡田千あき
２．発表標題 平和構築×スポーツ：民族の壁を越えて
３．学会等名 日本運動・スポーツ科学学会国際健康・スポーツ分科会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡田千あき
２．発表標題 スポーツで蒔く平和の種
３．学会等名 花巻北高校『創立90周年記念講演会』（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 岡田千あき、加朱将也、長谷一宏、奥野輔	４．発行年 2020年
２．出版社 大阪大学出版会	５．総ページ数 236
３．書名 スポーツで蒔く平和の種：紛争・難民・平和構築	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	バンダ　モーリス (Banda Morris)		
研究協力者	チャティーザ　ペトロス (Chatiza Petros)		
研究協力者	レモールウイリアム　ヨセフ (Lemir William Joseph)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	シプリアンンギリショ　マロ (Cyprian Ngilisho Maro)		
研究協力者	ステファンノベルト　マバガラ (Stephan Norbelt Mabagala)		
研究協力者	フィレモンジョン　マテル (Philemon John Materu)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関